久家一哲（くが いってつ）

生年月　1984年10月長崎県生まれ
最終学歴　大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻建築工学科目修了
業務経歴　2009年㈱昭和設計入社
現在、同社建築設計部主査

●担当した主なプロジェクト
2009年　堺高校エコ改修
2010年　順心病院
2011年　耳原総合病院
2012年　筑後地域消防指令センター・久留米消防署東出張所合同新庁舎
2013年　造幣局東京支局
2014年　太陽の塔内部再生プロジェクト
川西市市民体育館
2015年　御影公会堂耐震改修
2016年　泉大津市消防本部庁舎
2017年　西脇市新庁舎市民交流施設
●受賞等
川西市市民体育館
2017年　川西市景観賞
御影公会堂
2018年　登録有形文化財選定

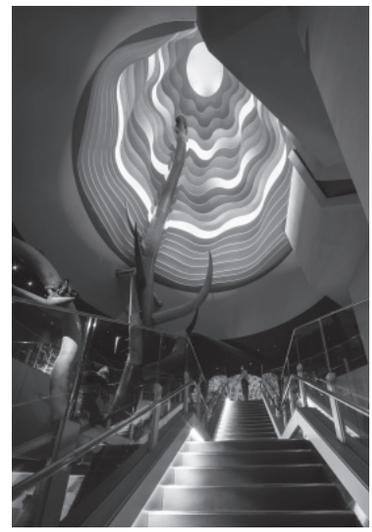
■青年技術者のことば

【時間軸を見据えベストな選択を】
過去・現在・未来の時間軸でとらえたときの最適解は何か常にイメージすることを大切にしている。建物の利用者の声や思いを尊重すること、ニーズを的確に汲み取り今の時代に合う提案をすること、未来においても価値を増しながら人々の生活の一部で有り続けること。
全ては利用する人に愛着を持ってもらいながら、長く大切に使ってもらうため。設計を志したときから今までぶれることのない思いである。

【人としての器と感受性を大切に】
建築づくりは一人では到底実現できない。構造・設備・施工・維持管理・運営などを見据えたバランス感覚と、視野の広さを持つことが重要と感じる。自らが率先して考えて動きながら関係者に思いを伝えることで、それぞれのベストを引き出しより質の高い建築へと導けるよう、人としての器を磨いていきたい。
どんな人の思いもくみ取っていける感受性を高めながら、利用する人のための提案力・技術力をこれから貪欲に身につけたいと思う。

■すいせん者

鳥居久人
㈱昭和設計　執行役員



太陽の塔内部再生プロジェクト　ー芸術作品から力強くメッセージを発する建築物へー

1970年の大阪万博のテーマ館として岡本太郎にデザインされ、万博後は人が立ち入れない工作物として残っていた。地上２階建てとして捉え、現行法規の取り扱いの元、不適合箇所を洗い出し、避難安全性・耐震性能を満足させ建築物へと組み立てなおした。改修時に内外部のデザインを変えることなく芸術を展示空間として再生し、一般公開させるに至った。

御影公会堂耐震改修　ー利用者の思いの詰まった建物を次の世代に引き継ぐー

1933年に創建され、太平洋戦争の空襲や阪神淡路大震災に耐えた歴史を持ち、映画「火垂るの墓」にも登場する。満足な図面もない中、利用者の声を聞き、写真や同じ設計者の建物を見てデザインを紐解いた。文化財登録を見据えて、創建当時の意匠を復元した。戦災で座屈した集会場鉄骨トラスは屋根スラブを落とさずに全て入れかえ補強を行った。

川西市市民体育館　ーひと・まち・自然をスポーツでつなぐー

「見る」「見られる」の関係を随所に設け、利用者が自然と体を動かしたくなるような仕掛けをつくりながら、多様なプログラムを展開できる体育館とした。見上げた際に競技に支障が出ないように徹底的に部材を合理化した格子梁や、維持管理のしやすいソックダクトを提案した。外からも中からも緑が見える中で心地よく体を動かせる体育館を目指した。